

# よう犬山へ、来てちょうたねえ！

全国常任委員長 あいさつ

## 技術指導の系統性を学び直す今日的な意味を共有しよう

森 敏生（全国常任委員長・武蔵野美術大学）

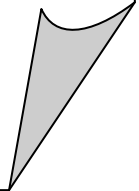
年末で公私ともに忙しい時に冬の全国大会に自主的な参加を決意されたみなさんを心から歓迎します。

今年公示された学習指導要領とその解説書では、「発達の段階に応じた指導内容の明確化・体系化」が「体育科の改善の基本方針」になっています。「技術指導の系統性の学び直し」という今大会のテーマは、これからの体育実践をめぐって重要な意味をもってくると思います。

およそ10年前の冬の大会でも「系統性研究」を学び直すことが「今日的課題である」と位置づけられたことがあります。その頃からさらにこのテーマの重みは増しています。第1に習熟度別指導や学級編成がひろがっています。第2に運動・スポーツ科学が進み、多様な目的別のトレーニング方法や指導法が普及してきています。第3に子どもの身体能力や運動経験の格差が広がり、体育授業における技術・戦術指導がむずかしくなっています。

体育科教育の実践的研究史において、「みんながうまくなること」をめざす技術と技術指導の実践・研究に一貫してこだわってきたのが体育同志会の「技術指導の系統性研究」です。わたしたちはいま、「みんながうまくなること」への飽くなき追求の精神と方法と成果を学び直すことが必要です。このことは、今度の指導要領の中身を本当の意味で「子どもと教師をはげます」実践に転換していくためにも不可欠です。

「技術指導の系統性研究」は「うまくなる」効果が期待できるプログラムやマニュアルの類ではありません。「みんながうまくなる」方法と意味を子どもとともに徹底的に追求し「系統性研究」の成果を生産的・創造的に学び直すことが必要です。この大会の提案と論議を通して、技術指導の系統性を学び直すことの意味と意義を具体的に明らかにし、それを若手・中堅の会員とベテランの会員とで共有していきましょう。そしてそれぞれの現場で子どもや同僚とともに指導要領改訂にともなう体育実践の課題と切り結んで「みんながうまくなる」実践を推進する見通しを開いていきましょう。



実行委員長あいさつ

## 第137回全国研究大会 犬山へようこそ！

忙しい年の瀬ですが、今年も同志会の冬大会が始まります。3日間という短い日程の中ですが、実り多い研究会になるように実行委員長としてがんばりたいと思っています。気軽に声をかけてください。

木曾川のほとりでの研究会になってから8年ぐらいになるのでしょうか。ここ数年、その川を眺めながら「今年は何んなことがあったかなあ」と思い返しながらい実行委員長のあいさつを考えているのですが、今年は何と言っても不況の嵐。そして、その中で人間の命や基本的人権を守る社会・国の在り方を考えさせられる年でした。

高齢者の医療問題や派遣社員の方たちへの非人間的扱いなどを見ても心が痛むし、ガソリンの大幅値上げや物価高騰の中で仕事ができずに店をたたんでいく人も間近にみました。「今のガソリンの値段は、いったいなんだ?! あそこの銭湯もつぶれなくてすんだのに！」と思うことが多々あります。不況の嵐は私の勤める私学にも及んでいます。私学は全体的に(『有名校』は違うようですが?)少子化と不況の中で「冬の時代」にさらに向かっているようです。

憲法では基本的人権の尊重がうたわれています。体育の実践と直接は結びつきにくい大きな課題だと思いますが、子どもたちの未来を考えたときに、無視できない課題だと思えます。

未来ある子どもたちに、体育科教育ではどんなことを考えていかなければならないか、考えを深めていけたらいいなと思っています。夜の交流も含めて、充実した3日間にしていきましょう。

第137回全国研究大会実行委員長 鈴木 正志

第1日目 12月26日(土) 19:00~21:00

開催趣旨説明(全国研究局・丸山真司)

報告 「同志会の系統性をめぐって - ドル平の教材価値とドル平研究の意味」

(和田孝平)

## 感想

ドル平は(同志会は)、「子どもの真実」にこだわり、そこから研究を出発させたとされているが、この原点を丁寧に理解しなければと思う。呼吸・息つきができない、苦しいという発言や事実が教師としてのヒューマニズムに訴えかけるといってそれはそうだと思う。しかし今大会はそれにとどまらず、子どもの事実が教師の技術指導に手がかりを与える面にもっと着目し、子どもの事実の何を見てドル平を開発するに至ったのか、そこを明らかにしたい。つまり子どもの否定的な事実のなかに積極的肯定的な可能性を読みひろくプロセスを明らかにして帰りたい。(宮城・Tさん)

長年水泳分科会に関わってきたのでたいへん興味深くお話を聞くことができた。私の問題意識としてドル平という同志会の財産を水泳分科会では生かしきっていないのではないかと。丸山さん(和田さん)のお話の中にあった3つの精神・方法を自分の実践、そして分科会内の研究にも意識して取り組んでいきたい。明日からの研究も楽しみである。(宮城・Sさん)

「技術指導の系統性」がどう生み出されるかを「ドル平」の実践研究史を聞き、学び直しの意識に少し納得がきました。「子どものつまずきの事実」から出発していること、「飽くなき科学的追求の精神」を持ち続けたこと、そして、「相互批判と集団的研究」を行ったことなど、これからの研究に大いに示唆に富むお話でした。他の領域や教科にも一般化できると思います。特に「子どものつまずきの事実」から出発することを忘れてはならないと肝に銘じたいと思います。(千葉・Sさん)

丸山先生、和田先生の報告から、ドル平の生まれた背景や体制・体勢が目には浮かぶようにわかりました。子どもの事実からとことん体育教師がこだわって追求し、『泳ぐ』ことを科学的に明らかにしていったという経緯を、自分の実践で大切にしなければいけないことだなぁと感じました。しかし、なぜそこまでこだわって科学的追求をするのかという素朴な疑問がわいてくるのですが、和田先生が「『水泳っておもしろいよ、すてきだよ』という喜びを味わってほしいから」という素朴な答えに泳ぐことの文化性を感じました。(大阪・Hさん)

和田さんの話の内容は、よくではないけれど大まかなところはわかりました。私もMさんと同じで「『系統性』からはずれぬ」という点（「たのスポ」2008年7月号）を読んで、でも子どもたちは泳げるようになっていくし...と思いました。たしかに、正座からやった場合には首の動きがはじめはありません。でも、ななめ浮き、そして呼吸法を覚えたら、水平姿勢での呼吸法を学ばせるわけなので、「ドル平」の基本的な考えはクリアーできていると思います。小平の実践でも、子どもたちが泳げるようになっていく事実があるわけですし、浮力をより意識させる意味では問題ないと思いますが...。またお話をうかがいたいと思います。（東京・Kさん）

第2日目 12月27日（土） 午前

報告 9:00～12:00

「水泳・水辺文化研究の成果と課題」 牧野 満（大阪）

「なぜみんなに『ドル平』を教えるのか」 小山 吉明（長野）

## 感想

### 牧野報告「水泳・水辺文化研究の成果と課題」

大阪の水泳プロジェクトの取り組みには、子どもたちの実態やつぶやきから授業をつくっていくという視点があり、系統性の研究を子どもたちの側から問い直す視点があると思う。（新潟・Nさん）

非常にわかりやすく興味をもって聞かせていただきました。今年初めて中学生にドル平を指導しました。子どもたちが泳げていく過程をみて感動しました。生徒の感想から「泳げるようになって嬉しい」という声もありました。ただ私自身の反省として中身（指導）の薄さを感じました。牧野先生の報告から自分なりに研究していきたいと思います。（滋賀・Mさん）

映像もあり、水泳指導の系統性について深く理解できた。丸山報告にあった「わかる内容の系統性」を発問との関連で示している点も参考になった。フラッグフットやサッカーでは、どのような「わかる」があり、それをどのような発問で引き出すのか（引き出されるのか）引き続き検討していきたい。また、それだけでなく特殊から一般（ドル平）にあたるものを他の種目でも検討したい。（岐阜・Kさん）

特に技術ポイントの絞り込みが、グループ学習を通じて、学ばせたい中身として捉えられてきたことに、プロジェクトで集団研究をしていることの大きな成果が表されているのだと思った。その中で、リズムは技術なのか？という牧野さんの疑問は出されていたが、これは水泳の直接の技術内容ではないのかもしれないが、学ぶ方法として、「わかる」と「できる」を一致させやすい。荒木さん流のことばで言えば、子どもにとっての学習を成立させる「感覚」として重要だと思った。マイネル運動の一般指標では局面構造と並び2大指標としてあげられてもいる。(和歌山・Hさん)

「わかる」をめぐる、ドル平の指導で ステップ表の各段階で「わかる」を考えた。ステップのまとめりごとに「わかる」をとり出し、ピンポイントで「わかる」授業をした。そうではなく、「泳ぐ」という技術全体にかかわる「わかる」を授業化する必要がある。この が技術の構造的認識ということなのか？ と「わかる」のとらえ方が私の中で姿を変えているが...(大阪・Nさん)

## 小山報告「なぜみんなに『ドル平』を教えるのか」

原理がわかると今までやっていたことの見方がかわって、急に興味深さが増してくるから不思議です。頭の重さを量ったり、体積を量るなどの実験から、自分の体や水に浮くということ泳ぐということへの認識が深まり、水泳の授業への取り組みはまったく変わってくると思いました。子どもとの実践的な研究から生み出されてきたドル平泳法。その中に含まれている学ぶべき内容をもっと魅力的に子どもたちに提示できる可能性を教えていただきました。小山さんの発想の豊かさに拍手です。(埼玉・Tさん)

中学だと、浮力についてあそこまで話し理解し合えると、生徒のドル平の考え方、とらえ方はより一層深いものになると思いました。実験器具、金づち君、2人での研究、とても興味をひくものばかりでした。先生のお話を、同志会以外の先生にも聞かせてあげて、「水泳」というもののとらえ方をもう一度一緒に考えていきたいです。(千葉・Hさん)

教える内容を浮力と重力にしばり、様々な実験を通して理解させていく授業、私もぜひ受けてみたいと思いました。体験を通して学んだ知識を「できる(泳げるより楽に泳ぐ)」につなげる。その後の変化に興味がありました。(京都・Dさん)

中学校のように泳力差が大きく、ドル平に対しても抵抗が大きい現場で、楽しい実験をしながら、水中体重と浮力について学習をさせているのは、おもしろいなと思いました。大変理論的なおかつ実験で認識しているので、生徒もよくわかったんだろうな。生徒同士の教え合いはないのでしょうか?(愛知・Tさん)

小山先生の実践について、いくつか勉強したことがあり、すごく独自性のあるアイデアをもった人なんだなあと思いつつ勉強させてもらっていました。今日初めてお会いしましたが、やはりとてもユニークなおもしろい先生だと思いました。内容に入らせてもらうと、まず一つ目にとっても興味深く思ったのが、水泳に関する基礎研究です。頭や腕の重さを量り、その人の重力体重に対する浮力を計測していました。科学的に分析して非常にわかりやすかったと思います。(Hさん)

同じ中学校でもなかなかドル平をみんなで教えるということではできていない。小山さんの豊富なアイデアはいつ聞いても楽しい。ドル平の原理や発展性の多さを証明してくれた。子どもたちの現実を見据えると困難なことはたくさんあるが、ドル平を教えることが意味のあることだと再認識させてくれた。初心者泳法だけではないことを実証するためには自分の勉強もし直さないといけないだろう。(神奈川・Mさん)

現場でドル平をやったことがありません。理由は時間数と生徒の参加率の問題としていましたが、今日の学習で最大の理由は自分の勉強不足だということがよくわかりました。水泳の授業数時間の中で、自分の軸がはっきりしていないと右往左往して時間がかかり、成果が上がらないと思います。ドル平こそしっかり学んで系統性を理解し、いらぬ枝葉をつけないことでいい授業ができると感じました。来年はやりたいと思いました。(滋賀・Mさん)

第2日目 12月27日(土) 午後

分科会 13:00~17:30

「同志会の実践研究から学んで」

A. 陸上運動研究の成果と課題

B. 器械運動研究の成果と課題

C. 球技研究の成果と課題

## A. 陸上運動研究の成果と課題

### 感想

「走る」とは何か? 「走れる」とはどういうことか? ...陸上における「ドル平」とは何なのか? 今日の議論では、それは具体的に「リズム走」なのか「あてっこペース走」なのかに収斂されたように思う。陸上とは時間認識をまず空間認識や身体認識で形づくっていく競技だとすると、小学校段階で育てるもの、中学校で育てるものが少しずつ見えてきたように思う。キーワードは「リズム」と「コントロール」。この言葉を手がかりに陸上の技術に関する構造的認識の中身を検討していきたいと思う。(宮城・Sさん)

陸上運動の本質規定が「リズムを含んだスピードコントロール」ということで各種目や教材について議論しましたが、ペースランニング、田植えラインからのリズム走、あてっこペース走、ダンボール走、それぞれ自分の感覚や動きにリズムを作り出力していくことによって、結果として記録を伸ばしていくものであり、教えていることが全部つながっているんだなあと思いました。中学生はこのリズムづくりにどう気づかせ力をつけていくかを考えて指導したり、カリキュラムづくりをしたりしていけばいいんだなあということがわかってきました。（長野・Kさん）

## B . 器械運動研究の成果と課題

### 感想

器械運動における「ドル平」とは？という問い自体に無理があるのかもしれないなあということを前提にしたうえで、今日気づいたことは、

ねこちゃん体操に続いて行われている「くまさんこんにちは」「こうもりふりおり」「大また歩き前転」「山とび」の中に、子どものつまずきに対応し技をうまくする要素がユニットとして（つまり表現として）つまっているのではないか。だから、ここから何かつくれるかもしれない。

金子明友氏の考えとの違いを明確にすることで、自らの立つ位置が見えるかもしれない。

山内さん個人の実践色がうすまるくらいに、多くの報告が集まる方がよい。

（埼玉・Nさん）

感想として、すごくレベルの高い話をしているんだと感じ、またその場にいられることをうれしく思っています。ただ、話についていけないことも多々ありました。ついていけるために、もっと実践が必要だと思いました。（2学期は跳び箱運動をしました。）（滋賀・Mさん）

器械運動の技の特質は、転回・回転なのではないか。それを基礎技術・ドル平に匹敵するものとして考えれば、新しい系がつかれるかもしれない。技の共通性から考えるのと、体の共通性から考えるのと、2通りの系統性の考え方があるのではないか。ちょっと指導の系統性を考える道筋が見えてきた気がする。（埼玉・Sさん）

## C . 球技研究の成果と課題

### 《サッカー分散会》

#### 感想

球技における基礎技術に種目の特性が入ると様々な議論が生まれる。たしかにじゃまじゃまサッカーは練習方法のひとつととらえた方が実践の方向も考えやすい。コンビネーションを向上させる場として有効である。ゆえにその発展を考えることには無理がある。だが、特に小学校の先生方にとってはサッカーをやる上でとても役立っていることを考えると、同志会にとって大きな財産であると思う。(神奈川・Mさん)

技術特質を「コンビネーションを含むシュート」ととらえ、基礎技術を「2人のコンビネーションによるパス・シュート」ということを耳にできたことで、サッカーへの考え方が少し変わり、見えた部分もある。じゃまじゃまサッカーと2:0、どう組み合わせ？ていくのか、自分自身まだ見えてないが、この先また勉強させていただいて、サッカーを指導できるようになりたい。(千葉・Hさん)

じゃまじゃまサッカーは、技術指導の系統性を捉え直すものではなく、2:0や3:0をゲームに生かせるようにするための指導の工夫であろう。技術練習をゲームへとつなぐスモールステップなのではないか。だから、2:0や3:0の学びが、じゃまじゃまサッカーで出現するのが重要な意味をもつ。

系統とは原理だから、小学生、中学生、高校生といった問題は出てこないはず。それが出てくるのは系統の捉え方がまちがっているからか。それとも系統そのものがまちがっているからか...? 少し気になった。(岐阜・Kさん)

「じゃまじゃまサッカー」なくして、子どもたちにサッカーの楽しさを伝えることはできない。この考えは今も変わらない。だからこそ、2:0との融合、コート広さなどの工夫の余地がいくつかわることを念頭に研究していきたい。(静岡・Kさん)



## 《バスケットボール分散会》

### 感想

まずバスケット分散会の世話人として、これだけ多くの方の議論の俎上にバスケットボールの基礎技術や系統性が上がったことを素直に喜んでいきます。いろいろな切り口の意見が聞けて刺激的でした。2：0か2：2かはもっと議論をつめたいところでした。2人のコンビネーションによって防御を破ってシュートを決める。その原理原則をわからせることが一番重要な内容になるのかなあ。形としては カットイン スクリーン ポストという3つのプレイに集約されるのだと思うのですが、それぞれのプレイの原理を明らかにしなければならないとも思います。ちなみにサッカーやFFでは、コンビネーションプレイの典型はどんな形になるのでしょうかね。（東京・Tさん）

この「分科会」に参加し、最後まで聞くことに終始、どの角度でバスケットボールの基礎技術（ドル平に相当）をとらえればいいのか。2：0をどう位置づければいいのか。とらえる角度がわかりにくかったから。その大きな原因が石田氏の提起した様相発達段階と2：0の関係が見えなかったからだと今日なりに最後わかった。でも2：0より2：2で教える課題を伝えるという実践法の主張や、ハーフコートからオールコートにいつ結びつけるか、ドリブルをどう位置づけるのかなどの質問などが出て、そうだ、バスケットで教える中身を身につけさせるためには、2：0で基礎技術、2：2及び様相発達研究は子どもたちの段階に即して問題発見（疑問をもつこと）をさせたりする装置だと理解。それにしても、星野さんの言った「子どもが熱心になるのは『決め手』と『かけひき』の課題や条件を取り入れたとき」は印象が深かった。（和歌山・Hさん）

# お待ちしております埼玉で

埼玉大会実行委員会

冬大会参加。ご苦労様です。師走の忙しい中でのみなさんの研究熱心さ、頭が下がります。その熱心さをぜひとも来年のさいたま大会へつなげてもらいたいと願っています。そしてできれば一人でも多くの仲間を募ってやってきてもらいたいです。

大会のコンセプトは

## 「夢～つながる～創る」

今の時代は、教育だけではなく、世の中しんどいことが多いです。だからこそ、同志会に集う私たちは明るく夢を語り合いたい。そしてその夢を語り合う仲間とつながりたいと考えています。

その夢を語り合う仲間とともに、この大会を創りあげる。そんなコンセプトです。子どもや青年たちの夢を描くことはもちろんですが、私たち教師と教育に関わる人たちが集う大会にしたいのです。

大会テーマは

## 「学び合う、高め合う、体育・スポーツの喜びを

### - 体育・健康教育で教える中身を深める - 」

です。学び合い、高め合うのは何も子ども・青年たちだけではなく、私たち大人もだとのメッセージを託しています。

日程は、

2009年8月7日(金)、8日(土)、9日(日)

なお、実技は8日(土)のみとなります。

この大会は全国常任委員会で「都市型大会」と位置づけられている大会です。研究の内容こそが勝負。埼玉でも「民舞」と「器械運動」そして「水泳」で研究の成果を発信しようと、実務だけではなく、毎回の大会へ向けての拡大推進講座で楽しく前に進んでいるところです。全国のみんなの笑顔が見たい。そんな思いで結集しています。さいたま大会、ご参集よろしく申し上げます。

文責：実行委員会研究局長 平野和弘

